『太陽』の文語体文芸文における時の助動詞の様相

丹　羽　　叶

キーワード：文体　『太陽』　文芸文　文語文　時の助動詞

1．はじめに

近代の日本語文体史は、言文一致運動における書き言葉口語体の整備と確立によって位置づけられる。野村（2013）によると、文芸文では、1900年を境に口語体が文語体より優勢となり、1907年頃には口語体が席巻した。さらに、文芸文での成功を受けて、実用文の代表格である新聞の社説でも口語体が採用され、書き言葉における標準の文体が口語体になったとされる。このような近代書き言葉における変化は、個々の表現の、主に出現頻度や多寡を取り上げることによって観察されてきた。しかし、その多くは文体による使い分けを中心に論じられたものであり、個々の表現の言語的特徴に注目したものは少ない。例えば岡本（1987）は、明治文語文を実用文と文芸文とに分け、両者における時の助動詞の多寡について調査する。それによると、実用文では、タリ、リ、キのみが使用され、文芸文では、タリ、リ、キが多いながらも、ケリ、ツ、ヌも使用されている（p.88）。確かに、実用文・文芸文で時の助動詞の使用数が異なっており、それが文体差として捉えられることは事実である。しかし後述するように、同じ文体においても時の助動詞に多寡がある。この要因は文体差に求めることはできず、個々の表現の用法や、文中位置・活用形、他の表現との共起関係といった言語的特徴の把握が必要である。しかし、このような形態的・文法的な観点から個々の形式に着目した分析や変化についての記述は、いまだ十全とは言えない。また既述のように、文芸文では実用文に先行して、文語体から口語体への移行が行われている。近代書き言葉における文体の変化の把握には、言文一致を主導した近代文芸文全体における通時的様相の観察、および、変化の出発点となる文語体文芸文における共時的様相の記述が、まず求められよう。

そこで本稿では、総合雑誌『太陽』における文芸文の中から、時の助動詞を取り上げ、その使用頻度・活用形の通時的変化を調査する（３節）。また文語体文芸文

における時の助動詞について、個々の形式の現われを形態的・文法的観点から分析し、近代文語体文芸文における共時的様相を大局的に把握することを目的とする（５節）。

２．調査対象資料・方法

調査対象とする資料は、総合雑誌『太陽』に掲載された文芸文である。用例採取には、国立国語研究所（2021）『日本語歴史コーパス　明治・大正編Ⅰ雑誌』を使用した。

『太陽』は、1895年に博文館から創刊された月刊誌である。『太陽』の総合雑誌たる所以は、その資料性にある。博文館がそれまでに刊行していた種々の雑誌を廃刊して一つの雑誌とした文字通りの総合雑誌であって、先行する雑誌に類を見ない広いジャンル、執筆陣、読者層を誇った（永嶺1997）。総合雑誌という性質上、多様な位相の言葉を反映する傾向にあり、著者が明らかである記事が多い。この点は、時事などにジャンルが偏る新聞などとは異なる。よって、当時の日本語を反映する資料として適当である。また田中（2013）は『太陽』のコアデータについて、文体を問わずに時の助動詞の使用頻度を調査するが、既述のように、口語体への移行は、文芸文が実用文に先行することが知られる。本稿では、まずもって、文芸文を対象とした観察が必要であると考える。

本稿の目的に沿った用例採取を行うべく、以下の条件を満たすサンプルを対象とする(注1)。カギ括弧で示す用語は『日本語歴史コーパス　明治・大正編Ⅰ雑誌』において、個々の用例に付されている形態論情報を表す。

①ジャンルが「文芸／913」

近代文芸文を調査するために、ジャンル「文芸」、NDC（日本十進分類法）番号「913（日本文学　小説・物語）」のサンプルを対象とする。

②本文種別が「地の文」

近代文語文の様相を反映するのは著者自身の言語、つまり引用や会話文を除いた地の文であると考える。

選定した資料から、分析の対象とする時の助動詞を採取する(注2)。

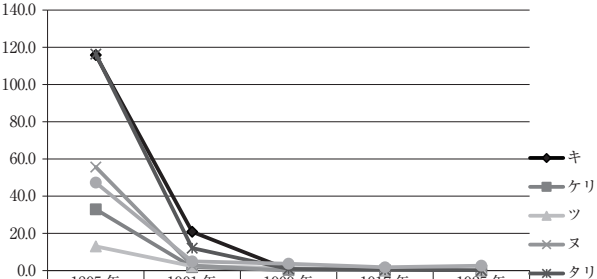
３．時の助動詞の使用量の概容

本節では、文語体文芸文における共時的様相を確認するに先立ち、言文一致を主導した近代文芸文における時の助動詞の使用状況を数量的に概観する。まず、時の助動詞の使用頻度を確認し、その多寡および消長を調査する。これにより、文芸文において、文体が文語体から口語体へと移行するにあたって、時の助動詞の推移および使い分けを把握する。

3.1. 使用頻度

文芸文における時の助動詞の使用頻度をグラフで示す（表１）。10,000語あたりの使用頻度（小数第２位四捨五入）を算出した。データテーブルをあわせて付す。

表１：時の助動詞の使用頻度



	1895 年	1901 年	1909 年	1917 年	1925 年
キ	115.8	20.9	0.5	0.3	0.2
ケリ	32.9	1.8	0.4	0.0	0.1
ツ	13.0	2.4	1.3	0.4	0.5
ヌ	55.7	2.7	0.0	0.0	0.1
タリ	116.4	12.1	0.9	0.4	0.1
リ	47.3	4.9	3.7	1.8	2.6

表１について、『太陽』の文芸文における時の助動詞の使用頻度を見ると、個々の形式によって、使用頻度に開きがあると分かる。

各年の使用頻度を見ると、1895年では、10,000語あたりタリが116.4語、キが115.8語と高い。次いで、ヌが55.7語、リが47.3語である。６年後の1901年を見ると、どの時の助動詞も使用頻度を減らしている。次に増減率を見ると、1895年における使用頻度の上位２形式であるタリとキが、1901年にはそれぞれ-89.6%、-82.0%と大幅に減少している。また、ケリが-94.5%、ツが-81.5%、ヌが-95.2%、リが-89.6%というように、全ての時の助動詞が、前年比-80%以上となっている。1900年を境とした、

文芸文における文語体から口語体への移行（野村2019）が、時の助動詞の消長からも確認できる。ただし、その減少幅は最小値が-81.5%（ツ）、最大値が-95.2%（ヌ）と10%以上の開きがあり、速度には個々の形式によって遅速がある。

表１より読み取れる、明治期後半から大正期にかけての文芸文における時の助動詞の全体的な傾向は、次の２点である。

①1895年から1901年にかけて、時の助動詞の使用頻度が減少する。

②時の助動詞の使用頻度の減少には、個々の形式によって遅速がある。

3.2. 活用形

次に、時の助動詞の活用形に注目し、偏りがあるかを確認する。『太陽』の文芸文より採取された時の助動詞について、各年に占める活用形の割合（小数第２位四捨五入）を示す（表２）。各年・各形式において注目すべき箇所に網掛けを施した。例えば、1895年のキの用例数は1,122例であり、そのうち、連体形の占める割合が82.6%であることを示す(注３)。

表２：『太陽』の文芸文における時の助動詞の活用形の現われ

	キ	ケリ	ツ	ヌ	タリ	リ
1895年	1122	318	126	539	1127	458
未然形	0.2%	0.0%	0.0%	1.3%	2.2%	0.2%
連用形	0.0%	0.0%	1.6%	2.8%	11.3%	4.8%
終止形	13.3%	43.4%	94.4%	94.6%	21.7%	34.7%
連体形	82.6%	40.3%	3.2%	0.7%	58.1%	59.6%
已然形	3.9%	16.4%	0.8%	0.4%	6.7%	0.4%
命令形	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.2%
1901年	114	10	13	15	66	27
未然形	1.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
連用形	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	12.1%	0.0%
終止形	23.7%	10.0%	84.6%	80.0%	9.1%	25.9%
連体形	71.9%	90.0%	7.7%	0.0%	74.2%	74.1%
已然形	2.6%	0.0%	7.7%	0.0%	4.5%	0.0%
命令形	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
1909年	4	3	10	0	7	28
未然形	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.6%
連用形	0.0%	0.0%	10.0%	0.0%	0.0%	0.0%
終止形	0.0%	0.0%	90.0%	0.0%	0.0%	21.4%
連体形	100%	66.7%	0.0%	0.0%	100%	75.0%
已然形	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
命令形	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

表２より、ほぼ全ての年次において、キ、タリ、リは連体形の割合が高く、ツ、ヌは終止形の割合が高いと分かる。また、時の助動詞の使用頻度は減少しながらも、特定の活用形に収斂する様相が見られる。1895年において、連体形の使用割合が高かったキ（82.6%）、タリ（58.1%）、リ（59.6%）は、1909年においても、連体形の使用割合がキ（100%）、タリ（100%）、リ（75.0%）と高い。また1895年において、終止形の使用割合が高かったツ（94.4%）は、1909年においても、終止形の使用割合が90.0%と高い。1895年において終止形の使用割合が高かったヌ（94.6%）は、1901年においても、終止形の使用割合が80.0%と高い。ケリは1895年では終止・連体・已然形に跨って見られるが、時代が下ると連体形への偏向が看取できる。

本節では、近代書き言葉における文体の変化を把握するべく、言文一致を主導した近代文芸文全体における時の助動詞の通時的様相を数量的に調査した。『太陽』の文芸文において、文語体から口語体へと文体の移行が進行する中で、時の助動詞は特定の活用形に収斂する様相が見られた。このような様相は、どのような要因に基づくのだろうか。

４．問題提起

近代文芸文における時の助動詞は、使用頻度を減らしながらも、特定の活用形に収斂する様相が見られた。文体・ジャンルを問わず『太陽』に現れる言語形式の変化について論じた田中（2013）は、このような現われが断定の助動詞ダ、ナリにも見られると述べる。田中（2013）では、そのダ、ナリの活用形の偏りについて、活用形ごとの由来の違いに原因を求める。例えば、断定の助動詞ダについて、増加が始まる時期と速度は、活用形ごとに大きく異なるという。1895年からある程度の頻度があるナ、ナラは、助動詞ナリを受け継ぐ語形だが、ダロ、ダッ、ダは、ナリとつながりを持たない新しい語形であるために、はじめの年次の頻度が少ないという（p.73）。しかし、本稿で扱う時の助動詞の場合、口語系の後継形式に活用形の一部が受け継がれるのはタリ（＞タ）のみである。口語系の後継形式を持たない時の助動詞の活用形の偏りは、他の観点から説明を加えなければならない。

本稿の調査では、近代文芸文における時の助動詞には、特定の活用形に収斂していく傾向・推移が確認できた（３節）。この傾向は、個々の形式によって何らかの意味・用法を使い分けていることに拠るものと考えられる。では、近代文芸文にお

ける時の助動詞の現われに看取される一定の傾向は、どのような意味・用法を反映するのか。変化の出発点の様相を把握するため、文芸文の中でも文語体の文章における時の助動詞を観察する。

5．時の助動詞の活用形の分布と用法

本節では、言文一致の出発点となる近代文語体文芸文における時の助動詞の様相を共時的に観察する。『太陽』の文語体文芸文における時の助動詞(注4)について、古典文法(注5)における時の助動詞の活用形の分布およびテンス・アスペクトに関わる用法と比較し、活用形の現われおよび文法的な側面から考察する。

活用形の偏りについて、活用形ごとの由来による説明は、タリを除く、口語系の時の助動詞を持たない形式には不向きであると述べた（4節）。そこで、古典文法における時の助動詞の活用形の現われと比較し、共通点・相違点を整理する。古典文法における時の助動詞は、『源氏物語』に現れるものを代表させる(注6)。近代の用例を検討する際は、第2節においてサンプルから採取された用例のうち、文体が「文語」である用例を対象に、無作為に100例抽出した(注7)。抽出した用例は、稿者によって形態論情報を確認し、誤りのある場合は修正し、適宜除いた。

5.1. キ

文芸文におけるキの活用形を見ると、連体形での使用割合が高い（表2）。これは、近代文語文に広く見られた現象であるのか。1905年12月2日官報、文部省告示第158号掲載の「文法上許容スベキ事項」を見ると、「過去ノ助動詞ノ『キ』ノ連體言ノ『シ』ヲ終止言ニ用ヰルモ妨ナシ」とある。連体形で終止するのは、古典文法に照らし合わせると誤用ではあるが、一般化していたために運用されたのだろう。文芸文に限らず、近代文語文において、キは連体形の使用が多かったことが分かる。

文語体文芸文におけるキ100例を見ると、連体形83例のうち連体形終止の用例はわずか2例であった。他の81例は、連体修飾の用例であった。文語体文芸文におけるキの連体形は、「文法上許容スベキ事項」のような連体形終止ではなく、連体修飾の用例がほとんどだと分かる。ここで『源氏物語』におけるキの活用形ごとの用例数を確認する（表3）(注8)。

表3より、『源氏物語』におけるキの活用形は、連体形が多い。古典文法におけるキは、近代文芸文と同様に、連体形に偏りがあったと見てよい。

吉田（2004）は、中古の資料を対象として、文末に位置する時制に関する助動詞の活用形形態を調査する。それによれば、地の文におけるキは、終止形終止の比率が他の語と比較して低く（37.1%）、已然形終止の比率が高い（30.5%）。他の語の地の文における終止形終止が8割を超えているにも関わらず、キの終止形終止は4割に満たないという。また、会話文における他の助動詞の終止形終止が、ひとまとまりの会話の末尾にあらわれる比率が6割であるのに対して、キの終止形終止は、ひとまとまりの発話の途中にあらわれる比率が6割以上と逆転している。キの終止形について「会話文においても、発言権の移動のない位置（発話の途中など）に多く現れている」（p.82、カッコ内稿者）と述べる。近代文語体文芸文のキの活用形が連体形（連体修飾）に偏るのは、推論の域を出ないが、古典文法におけるキの連体形の偏りと関係する可能性がある。

表3：『源氏物語』における キの活用形

未然形	2
終止形	117
連体形	2594
已然形	434
総計	3147

次に、キの文法的な側面について述べる。採取されたキの連体形83例のうち、⑴のような連体法が33例、⑵のような準体法が15例あった（注9）。

⑴　姉君は、今しがたまで、妾と共にうたげの席におはせしもの を、（60M太陽1901_08023　14970「懺悔文」1901中内蝶二）

⑵　臼井も頼み甲斐ありしを喜び歸邸のうへ村井迄主計頭が承諾の旨を復命に及びければ村井より淺姫へ言上せしに淺姫も大に滿足せられたり（60M太陽1895_06025　128370「涙の媒介」1895条野採菊）

⑴は「今しがたまで、私とともに宴席にいらっしゃったものを」と解されるが、中古語では⑴のような発話当日中の過去の事態にキを用いることはない（鈴木1999、pp.277-278）。発話当日中の事態に対してキを用いて過去を表す用法は、近代文語文の用法と言える。⑵の「ありし」は「ざりし」「なりし」と同様に、近代文語文に多く見られる形式である。吉田（2004）の指摘と合わせて考えると、文終止の位置で使用しにくいというキの性質が、連体法・準体法という環境において、多くは「固定的な承接関係」（岡本1987、p.88）として現れていると考えられる。

近代文語体文芸文におけるキの活用形の偏りは、古典文法におけるキの現われと共通するが、文法的な意味においては、古典文法と異なる運用が見られる。

5.2. ツ

文芸文におけるツの活用形の現われを見ると、終止形での使用割合が高い（表２）。これは岡本（1987）でも「活用しない文末辞となるのは、蘆花に限らず明治文語一般に見られる傾向である」（p.89）と指摘される。このことは古典文法の様相を受けたものなのだろうか。そこで、『源氏物語』におけるツの活用形ごとの用例数を確認する（表４）[注10]。

表４より、『源氏物語』におけるツの活用形は、近代文芸文に見られたような終止形への偏りはない。古典文法においては、活用形の多寡はあるものの、連体形を中心として、未然形から命令形までの使用が認められる。ツの終止形への偏りは、古典文法に由来するものではなく、近代文芸文の特徴と言える。

表４：『源氏物語』におけるツの活用形

未然形	207
連用形	116
終止形	389
連体形	6144
已然形	151
命令形	23
総計	1545

次に、ツの文法的な側面について述べる。文語体文芸文におけるツの終止形を見てみると、語形としては終止形だが、アスペクトを表すというよりは、接続助詞（岡本1987）、並列表現[注11]（京2016）というべき用例が多くみられる。⑶のように、ツが承接する動詞（聞流す）と、それに続く動詞（見る）の動作主体が変わらず、二文を連結する場合、ツは接続助詞的に機能していると言える。このような用例がツの終止形95例のうち、31例見られた。

⑶　女主人は我に食事をもち來りしに、若き男は立上り、やさしき聲して何事をかいと長く物語りぬ。女はただ打笑みて聞流しつ、今並び立る所を見ば、何人にても、似合しからずといふ人はあらざるべし。（60M太陽1895_07029 56120「浮世のさが」1895小金井喜美子）

また⑷⑸のように、語形は終止形であり、二つの動作を列挙する並列表現の用例が27例見られた。

⑷　舳櫓を押せる舟子は慌てず、躁がず、舞上げ、舞下る浪の呼吸を量りて、浮きつ沈みつ、秘術を盡して漕ぎたりしが、（60M太陽1895_01018　67220「取舵」1895尾崎紅葉）

⑸　妻の阿定は勝田に對ひて『モシ旦那、どうか娘を彼人へ渡さぬ工夫は御座りませんか、表向の裁判に持出したら、十七年來育てた娘、此方の負にも

成ますまいに…』と泣つ嘆きつ口説きければ。（60M太陽1895_09030 56820「夜の鶴（下）」1895福地桜痴）

では、近代文語体文芸文におけるツには、アスペクトを表す用法が全くなかったか、というとそうではない。(6)や(7)のように、文末において動詞に承接するツは、アスペクトを表す。

(6) 待て、待て、と呼びつ。お大は立留りて、聞くこと、何を、其處でお云ひなされ、と再び足は返すまじきさまなり。（60M太陽1895_12025　133580「銀釵」1895渡邊霞亭）

(7) 間も無く女房と共に醫師も來つ。診察の結果、回生の法なしと云へば、お村は言葉は無くて、直泣きに泣く。（60M太陽1895_11024　74800「狂言娘」1895広津柳浪）

(6)は、「待て、待て」と「呼ぶ」声が聞こえた「お大」が「立ち止まる」のであるから、「呼ぶ」に承接するツは「呼ぶ」という動作が終わったことを表す。(7)は、「医師」は「お村」のもとに到着し、診察の結果、手の施しようがないと言われた「お村」が泣いている。中古語では、移動動詞に承接するツは「移動が終わってどこかに到着している」（井島2011、p.191）ことを表すため、(7)はツの本来的な用法と言える。(6)(7)は双方、文が切れる文末において動詞に承接するのであるから、アスペクトを保持しているのは当然のことかもしれないが、こうした用例は多くはない。

5.3. ヌ

文芸文におけるヌの活用形の現われを見ると、終止形での使用割合が高い（表２）。この様相を古典文法のそれと比較するため、『源氏物語』におけるヌの活用形ごとの用例数を確認する（表５）[注12]。

表５より、『源氏物語』におけるヌの活用形は、近代文芸文に見られたような終止形への偏りはない。古典文法においては、活用形の多寡はあるものの、終止形と連用形を中心として、全ての活用形の使用が認められる。ヌの終止形への偏りは、ツと同様に、古典文法に由来するものではなく、近代文芸文の特徴と言える。

表５：『源氏物語』における ヌの活用形

未然形	511
連用形	1007
終止形	1154
連体形	406
已然形	154
命令形	32
総計	3264

次に、ヌの文法的な側面について述べる。文語体文芸文におけるヌの終止形につ

いて、採取されたヌの終止形92例のうち、４例が打消の助動詞ズの連体形であったため除いた。⑻は、文末において動詞に承接するヌの終止形の用例である。

⑻　瓶子をとりてなみなみとつぎぬ。重美は唯一息にのみほして。（60M太陽1895_10028　16080「阿新」1895依田学海）

⑻は、酒器に「つがれた」酒を「重美」が一息で飲み干している。「重美」が酒を飲み干す前に、酒器に酒を「つぐ」という動作は終わっているはずである。

⑼　さてふたたび机に向ふほど、若き女主人は、ゆるし給へといひて入來りぬ。（60M太陽1895_07029　45380「浮世のさが」1895小金井喜美子）

⑼は、「若き女主人」が「入って来た」場面である。「入って来る」は、「若き女主人」が閉めた戸を開けて部屋の中に入る動作を、部屋の中にいる「おのれ」から述べており、空間的な移動を表している。移動には、出発、移動中、到着と移動の局面があり、⑼では「若き女主人」は部屋の中に到着済である。中古語の移動動詞に承接するヌについて、井島（2011）は「出発し移動中」（p.191）を表すという。⑼は移動を終えて室内にいるため、中古語とは異なる用法と言える。

⑽　お松が初七日も今日となりぬ。（60M太陽1895_11024　123980「狂言娘」1895広津柳浪）

⑽について、「なる」は動作性を伴わない動詞である。「今日」が「初七日」であり、その日が来たことを表している。ヌは、動作性を伴わない動詞である「なる」のような、いわば変化の結果のような動詞に承接し、述べる事態が成立したことを表す。文末でアスペクトを表わす用法が少ないツと比較して、ヌは、より広く一連の「終わった」事態を述べられると考えられる。

5.4.　ツとヌに関する一考察

ここで、近代期の総合雑誌『太陽』の文芸文におけるツとヌについて、その差異が何に起因するのかを考察したい。ツとヌの相違点をまとめる。

①ツと比較して、ヌの使用頻度が高い。

②ツは文中で接続助詞的に使用される用例が多い一方で、ヌは文が切れる文末で終わった事態を表す用例がほとんどである。

これが何に起因するかを考えるにあたって、先行論の示唆的な指摘を踏まえて考えよう。吉田（2004）は、中古語における文末のツ、ヌについて、地の文では両者の間に大差はないが、会話文での終止形終止の比率はツが19.3%であるのに対して、

ヌは68.1%と明瞭な対比を示すという（pp.84-85）。また井島（2011）は、中古語において、ツは、前後の文や節で表される事態との部分的な時間的前後関係を表す局所的テクスト機能を果たし、ヌは、場面の始発や場面の終結といった場面転換を表す大域的テクスト機能に関与するという（pp.273-281）。以上よりヌは、中古語において、事態が終わって次の事態が始まる部分、すなわち一連の事態の終了の表示に使用された。近代文語体文芸文においても、一連の事態の終了を表示する場合、その点が引き継がれたと考えられる。

これらの先行研究から導き出される推論は、ヌは、近代文語体文芸文において、一連の事態の終了を表示する素地を備えていたということである。よって、近代文語体文芸文において、ツは、文末で動詞に承接した場合にのみ、終わった事態を表示する機能が化石的に残存し、ヌは、文末終止の位置で、一連の事態の終了を表示する機能が発達したと考える。

5.5. タリ・リ

文芸文におけるタリ・リ[注13]の活用形の現われを見ると、連体形での使用割合が高い（表２）。この様相を古典文法のそれと比較するため、『源氏物語』におけるタリ・リの活用形ごとの用例数を確認する（表６）[注14]。

表６より、『源氏物語』において、タリ・リの活用形は、近代文芸文に見られたように、連体形への偏りが見られる。この点から、タリ・リの連体形への偏りは、古典文法に由来する可能性がある。ただしタリは口語系の形式に後継形式を持つため、口語文法からの検討も要する。

表６：『源氏物語』におけるタリ・リの活用形

	タリ	リ
未然形	276	88
連用形	346	230
終止形	753	961
連体形	2620	1872
已然形	337	296
命令形	2	0
総計	4334	3447

吉田（2004）は、中古語のタリ・リを観察し、文末に位置する場合、活用形形態に関しては、両者ともほとんど同じ分布を示すと述べ、文末の活用形の現われから見ても、時制辞としての性格の違いはないという。地の文については、両語ともに終止形終止が８割台、連体形終止が１割台であると述べる。会話文については、已然形終止が４％前後であり、残りは終止形終止と連体形終止が半々であると述べ、実現済みの状態を表現するという（pp.84-85）。また、『源氏物語』における活用形の現われおよび連体法・準体法の用例を調

査したものに井島（2011）がある。それによれば、全例に対する連体形の割合は、タリ・リともに半数以上が連体形であり（pp.282-283）、本稿の表６と符合する。

次に、タリ・リの文法的な側面について述べる。タリ・リの連体形について、採取されたタリ・リの連体形60例のうち、37例が名詞を修飾する連体法であった。

⑾　されど故意と仕事衣を着けたるまま にて坐れば、何故着換えぬの、と不審しげに問ふを、その事には答せず。（60M太陽1895_12025　79170「銀釵」1895渡邊霞亭）

⑿　かくありてのち、節子は連りに涙ぐめる目 をふさぎて、霎時が程は何をかうち案じ居たりけるが、（60M太陽1895_03014　89530「吾妻錦繪」1895須藤南翠）

⑾　は「わざと仕事着を着けたまま」、（12）は「涙ぐんだ目」と解される。「着用した」状態や「涙ぐんだ」状態は、過去の動作や変化によって、主名詞に起こった状態の保持を表す。

採取されたタリ・リの終止形21例について、形態論情報に誤りのあった用例２例を除くと、状態を表す用例が多く見られた。

⒀　腰掛の上にはもえぎ色の、頂尖りし帽子ありて、鳥の羽もてかざられたり。（60M太陽1895_08032　22950「浮世のさが」1895小金井喜美子）

⒀について、帽子に「鳥の羽が飾られた」状態にタリが使用される。

タリ・リが、主として連体形で、過去の動作や変化がもたらした状態を表すのは、古典文法の影響によるものと考える。一方で、古典文法とは異なる用例も見られた。

⒁　柳馬場の能學堂に、月並の催會ありけり。吾は誘ふ人のありて、共に見物に行きしに、不圖見れば、脇正面の一段高き棧敷に、藤代の老公も來て居たり。さて其傍を見れば、日外高尾にて會ひたる子爵の君も居たり。（60M太陽1895_03015　57020「昭君怨」1895巌谷小波）

⒁の第２文「來て居たり」の「て居たり」は、タリが「て＋居る」に後接する点において、補助動詞テイルに近しい表現と言える。第３文では、書き手が「子爵の君」に会ったのは催会よりも前であるから、タリは過去を表す。第３文の「居たり」のタリについて、存在動詞にアスペクト形式が下接できない点から、口語系の形式タ相当、すなわち過去を表すと捉えるべきだろう。

タリ・リは、文中において連体修飾節を構成する場合が多く、状態化辞として古

典文法の用法を保持しているが、一方で口語の影響を受けた用法も使用されている。

６．結語

本稿において、近代書き言葉における文体の変化を把握するべく、言文一致を主導した近代文芸文全体における時の助動詞の通時的様相を数量的に調査した。また、言文一致の出発点となる近代文語体文芸文における時の助動詞の様相を共時的に観察した。結果、次の点が確認できた。

Ⅰ　形態的な側面

①時の助動詞から口語系の助動詞への移行は、1895年以降進行する。

②時の助動詞の使用頻度の減少には、遅速がある。

③文体の移行が進行する中で、時の助動詞キ、タリ、リは連体形、ツ、ヌは終止形というように、特定の活用形に収斂する様相が見られる。

Ⅱ　文法的な側面

①キは、主として連体法・準体法において、過去を表す。

②ツは、文末で動詞に承接した場合にのみ、終わった事態を表示する機能が残存した。ヌは、文末終止の位置で、一連の事態の終了を表示する機能が発達した。

③タリ・リは、連体修飾節を構成する場合は、古典文法の用法（状態化辞）を保持する。文末には、口語文法の影響を受けた用法も使用される。

以上、本稿では、近代書き言葉における文体の移行について、文語体文芸文を対象とし、時の助動詞を形式面の指標として検討した。従来、個々の形式の使い分けや偏りは、文体差と捉えられてきたが、本稿では、文芸文という特定のジャンルの中で、文語体における個々の形式の形態的・文法的特徴の現れと変化を捉えた。本稿で明らかにしたことは、近代の文語体内部の移行を捉えたものであり、言文一致期における文体の変容過程の把握の一端を担うものである。文語体文芸文における口語系の形式の精査や、口語体文芸文との比較といった点は、今後の課題としたい。

【付記】本稿は、稿者が2021年１月に名古屋大学大学院人文学研究科に提出した修士論文の一部を改訂したものです。執筆に際しては、先生方及び審査員の皆さまに、貴重なご指導とご意見を賜りました。記して厚く感謝申し上げます。

注

（注１）本稿では、コアデータ・非コアデータともに調査対象資料とした。非コアデータの中には誤った形態素情報が付与された用例も含まれるが、変化の概容は把握可能であると考えた。

（注２）検索条件式は以下の通りである。タリについては、検索条件式で採取された用例のうち、「語彙素細分類」が「完了」である用例を調査対象とした。

「キ」キー：（語彙素="き" AND 品詞 LIKE "助動詞%"）

「ケリ」キー：（語彙素="けり" AND 品詞 LIKE "助動詞%"）

「ツ」キー：（語彙素="つ" AND 品詞 LIKE "助動詞%"）

「ヌ」キー：（語彙素="ぬ" AND 品詞 LIKE "助動詞%"）

「タリ」キー：（語彙素="たり" AND 品詞 LIKE "助動詞%"）

「リ」キー：（語彙素="り" AND 品詞 LIKE "助動詞%"）

（注３）1917年および1925年は、用例数が少なく、文語体から口語体への移行がかなり進行した時期であるため、外れ値とみなし、記載しない。

（注４）なお、テンスだけでなくモダリティにも関わるとされるケリ（鈴木1999）については、説明が煩雑になるのを避けるため、以降の議論では取り扱わない。

（注５）本稿では、いわゆる学校文法を古典文法と称し、近代の文語文法と区別する。

（注６）用例採取にあたっては、国立国語研究所（2020）『日本語歴史コーパス　平安時代編』（2020年12月22日確認）を使用した。

（注７）抽出した例に近い位置にある表現については、言及する場合がある。

（注８）検索条件式「キ」キー：（語彙素="き" AND 品詞 LIKE "助動詞%"）

（注９）稿者によって、下線および囲み線を付した。

（注10）検索条件式「ツ」キー：（語彙素="つ" AND 品詞 LIKE "助動詞%"）

（注11）京（2016）は、近世後期以降のツの並列表現について、タリの並列表現の拡大を受けて衰退しながらも、タリとは異なり、連用修飾語としての用法を持っていたために、並列される二つの動作が交互に繰り返して行われることを表す反復並列の用法は、継続して使用されたと述べる。

（注12）検索条件式「ヌ」キー：（語彙素="ぬ" AND 品詞 LIKE "助動詞%"）

（注13）タリ・リには文法的な意味の差はないと考えられるため（吉田2004）、本稿では区別せずに扱う。

（注14）検索条件式「タリ」キー：（語彙素="たり" AND 品詞 LIKE "助動詞%"）、「リ」キー：（語彙素="り" AND 品詞 LIKE "助動詞%"）

参考文献

井島正博（2011）『中古語過去・完了表現の研究』ひつじ書房

岡部嘉幸（2008）「雑誌『太陽』における時の助動詞――文体と時の助動詞使用のダイナミズム――」『ことばのダイナミズム』pp.353-368くろしお出版

岡本勲（1980）『明治諸作家の文体―明治文語の研究――』笠間書院

―――（1987）「文体の違いと語法の差―明治文語の「ぬ」「つ」をめぐって――」『文学・語学』114：pp.86-97桜楓社

京健治（2016）「並列表現『～ツ～ツ』の消長に関する考察――動作作用の並列表現の推移補遺――」『西日本国文学』３：pp.57-44

鈴木浩（1990）「接続助詞『し』の成立」『文芸研究』64：pp.149-168明治大学

鈴木泰（1999）『改訂版　古代日本語動詞のテンス・アスペクト――源氏物語の分析――』ひつじ書房

田中牧郎（2013）『近代書き言葉はこうしてできた』岩波書店

永嶺重敏（1997）『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部

野村剛史（2013）『日本語スタンダードの歴史――ミヤコ言葉から言文一致まで』岩波書店

――――（2019）『日本語『標準形』の歴史　話し言葉・書き言葉・表記』講談社

山本正秀（1965）『近代文体発生の史的研究』岩波書店

吉田茂晃（2004）「文末時制の活用形について」『山辺道』48：pp.77-89天理大学

使用資料

文部省（1905）「文法上許容スベキ事項」『官報』文部省告示第158号

使用コーパス

国立国語研究所（2021）『日本語歴史コーパス平安時代編』https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/heian.html（2020年12月22日確認）

国立国語研究所（2021）『日本語歴史コーパス明治・大正編Ｉ雑誌』https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html#zasshi（2020年12月25日確認）

（にわ・かなえ／愛知県立知立東高等学校教諭）